

## 台湾作家林文月の日本文学とのゆかり

倪 金華<sup>〔補〕</sup> 著 （中井 政喜訳）

### 1 .

林文月は、台湾省彰化県に原籍がある。1933年上海に生まれる。台湾大学中文学部教授、日本京都大学人文科学研究所研究員、米国シアトルのワシントン大学客員教授を務めた。中国の六朝文学、中日比較文学を専攻する。学術的論著のほか、散文創作と文学作品の翻訳に従事する。主要な作品には、『京都一年』や『遙遠〔遙か彼方〕』、『午後書房〔午後の書斎〕』、『交談〔話し合うこと〕』、『作品』、『源氏物語』（翻訳）等十数種がある。台湾「国家文芸賞」と、「中国時報」散文推薦賞、第一回翻訳賞を受賞した。現代台湾の十大散文家の一人である。

林文月は大学の教師であり、その生活は終始キャンパスを離れたことがない。しかし林文月は多年、執筆著作の習慣を培って、学術研究論文の著書、散文の創作、文学作品の翻訳という異なった三種類の執筆形式を、相互に激しく波立たせ、調整共存させてきた。林文月はこの異なった三種類の著作分野で、歓迎すべき成果を上げている。林文月の散文創作は大部分、自身の経験した往事の生活を描くもので、心情を述べ、過去を思い、文筆細やかである。幼年時代の生活の追憶、親しかった師友への愛惜、異国における山水の風情の描写があり、貴重な記録となっている。それは、林文月の温厚な精神、精通した学識を示し、文章の端々から人を打つ真摯な思いが透けて現れ、人間世界に調和への兆しと、希望をもたらすものである。

散文創作における文化的歴史的背景から考えるならば、林文月と日本文学の重要な関係に気づくであろう。林文月は多量の時間を投じて、日本の有名な古典的文学作品『源氏物語』、『枕草子』、『和泉式部日記』、及び現代の著名な作家川端康成、曾野綾子等の小説を翻訳し、注釈を施した。林文月は京都大学において研究員であったとき、日本の高名な作家・教授と直接の対話や比較的深い交遊を持っている。日中間の悠久な文化的関係、及び相対的に近い民族

心理と文化的伝統、途切れることのない両者の文学的ゆかり、とりわけは小学生のとき上海で受けた日本語教育、これらが林文月を日本文化の中へと自然に歩ませた。

林文月は日本文学を翻訳することから、執筆の方法をも吸収し、懸け隔たる時空を越えて、千年前の作者と対話を行い、自らの人生の感得を述べる。「低的心情 致『枕草子』作者〔あなたの心情 『枕草子』の作者へ〕」で、林文月は清少納言の悲哀の心境を細やかに理解し、宇宙・自然に対する、四季の移りゆきに対する鋭敏な観察力に感嘆する。女性という角度から互いの心を通わせ、作者への尊敬と愛慕を表現する。<sup>1</sup>日本の文学作品を翻訳するがゆえに、翻訳と関係する散文を執筆すること、これが林文月の散文創作の重要な構成部分となっている。作者との対話形式によって互いに理解を深め、自己の翻訳の感想を表現することは、紛れもなく林文月の散文構想上の独創であると言える。

日本滞在の散文のなかに、日本文学についての林文月の豊かな素養と、日本文化に対する深い理解、日本の友人との厚い友情を見ることができる。「雨游石山寺〔雨のなか石山寺に遊ぶ〕」は、日本の友人秋道夫人とともに雨の京都で寺に遊ぶ様子を述べる。初夏の雨が石山寺に降る美しい景色を描写し、激しく転変した秋道夫人の身の上をさしはさんで、「十年一昔」の感慨を表現する。この散文は、石山寺の雄渾な山石と緑の木々の葉を描いて、詩情豊かな境地を配置し、静謐超俗の美を表現する。石山寺には、古典文学の高名な作者紫式部の供養塔と、芭蕉の記念碑がある。無言の碑塔を前にして古人と心を通わせ、林文月は理解する。「人はみな死ぬだろう、木々ほどには強くない。しかし、人は木々と同じように不朽でありうるかも知れない、固い信念があれば、文筆の大業があれば。」<sup>2</sup>文章を通して、作家の精神の命は不朽でありうる。これは文学の永遠の生命力に対して林文月が追い求める内容でもある。こうした感得の中に、文学の事業に孜々として努める林文月の内在的動力を発見するであろう。

日本文学の中に表現されるものは往々にして小さい情景であり、繊細な情感、微小な現象、瞬間的な悟りである。そこから流れ出るものは日本文学特有の淡々とした悲哀、綿々とした憂愁であり、またたちまち消えゆく恬淡とした喜びがある。『源氏物語』は一連の生活の細部を詩化し、内在的体験を通して命のこめられた悲劇性を表現する。林文月の散文が自己の生活を題材とすることと、

その芸術表現の手法から見て、彼女の散文創作に対する日本文学の影響を見ることができよう。

総じて、日中比較文学の研究、日本文学の名著の翻訳、日本の友人との交遊を記述すること、日本滞在における旅行の印象、これらが林文月の文学人生の重要な構成部分となっており、同時に散文創作に豊かな題材をもたらした。文学的観念の摂取、文学的視野の開拓から、文学的技巧の参照にいたるまで、林文月と日本文学の親密な関係を発見しえよう。

## 2 .

林文月は長期にわたって台湾大学で教鞭を執った。その主要な専攻は中国古典文学で、六朝文学を講義した。林文月は中国の伝統的文学芸術について独特な見識と精通した素養を持ち、学術的論著には「謝靈運及其詩〔謝靈運とその詩〕」、「南朝宮体詩研究」、「唐代文化对日本平安朝文壇の影響〔日本平安朝の文学に対する唐代文学の影響〕」等がある。林文月の散文創作は、日本文学と密接な関係があるだけでなく、中国伝統文化の影響については血肉を分け、気脈の通ずる歴史的関係がある。家国に対する意識、肉親の情、師友への思い等古典文学における伝統的テーマは、林文月の筆に継承されて、中華民族の独特な歴史的伝統と民族的心理を映し出し、民族の芸術的理想と芸術的趣味を反映する。

林文月は肉親の情、友人の情、師弟の情を重んじ、それを文にこめる。筆先から至情の思いが浸透し、散文の独特な魅力となる。林文月は言う、良い散文の内容は、「必ずや『真摯』の二字にある。わざとらしさ、無病呻吟は、いずれも手本とするにたりない。」<sup>3</sup>と。林文月の散文を読むとき、あたかもその広く開かれた精神の中に入り、心底からの言葉を聞くように感じて、彼女の真摯な気持ちに打たれる。「白髪与臍帶〔白髪と臍の緒〕」は、亡き母親の誕生日に書かれた。林文月は「臍の緒」と母の「白髪」という具体的な二つのものを選んで、母と娘の間に受け継がれる肉親の心情の物語をたどり、心が引きちぎれるような哀悼と懐かしさをこの二つのものに託して母に寄せる。<sup>4</sup>「父親」の一文は、こんこんと病床に昏睡する父親を目の前にするところから筆を起こす。四年前父が手術をしたときの胸騒ぎを回想し、みすみす病魔が一寸一寸と衰えた肉体を蚕食するのを目にする。こうした胸の張り裂けるような沈痛と悲嘆は、涙を誘う。<sup>5</sup> 古今内外において父と子の愛情と永別を描く作品は決して

少なくない。しかし林文月のように沈痛にして人を打つものは少ない。このほか、「給母親梳頭髮〔母の髪を梳く〕」<sup>6</sup>、「我的舅舅〔叔父さん〕」<sup>7</sup>等の散文では、肉親の深い至情が浸潤している。細かな往事についてほのかに浮かぶ追憶と、遠いそして近い空間時間の移動にともなう、情に色濃く染まる林文月の筆は、読者を深い情感に充ちた記憶の中に導く。

肉親の情、友情についての文章は常に、平凡で、些細な、言うに足りない事を選び、その人の個性と感情を表現する。素朴で自然な筆遣いによって、事柄を述べ情を語り、誠実で心のこもった感じをあたえ、共感と同情を起こさせる。台静農先生は台湾大学中文学部において造詣が深く声望の大きい教授であった。人生の大切な転換点で、林文月は先生の親切な指導を受ける。林文月は先生のために肖像画を描いたこともある。台静農先生に深い敬意を抱き、多年にわたる師弟の交わりのなかで、堅い友情を結んだ。台静農先生をしのぶ文章には、「台先生和他的書房〔台静農先生とその書斎〕」<sup>8</sup>「台先生写字〔台静農先生書字〕」<sup>9</sup>「台先生的肖像〔台静農先生の肖像〕」<sup>10</sup>等がある。林文月は身近な体験に基づき、多年先生と交流した師弟の友誼を述べる。台静農先生の酒や煙草、書道に対する個性的な好みを語って、ありありと往事を彷彿させる。我々が目の当たりにするのは、名利に淡泊な、伝統的中国文人の節操と気骨である。林文月は決して美しい言葉を使っていない。質朴で飾り気のない文章を用い、先生の生活の細部を叙述することによって、人物の姿を躍如とさせ、師弟の真摯な友情を明瞭に表現する。これは我が国古代散文の「事に即きて以て情を寓せる」という伝統的書き方である。素朴な文筆によって客観的に物事を叙述し、そのうえに作者の主観的な感銘を加えるものであり、歡喜悲哀の思いは心にしみとおる。含蓄をもって真摯に情を述べるために、林文月は抒情と叙事の結合する方法を採用し、その述べる情を具体的でまた含みのあるものとする。台静農先生は教育、学問研究のほかに、書道や文人画、篆刻にも独特な味わいを持ち、有名であった。林文月は師に対する尊敬の気持ちを先生の手の写真に凝集し、その文末において画竜点睛の筆により自己の心情を表現する。

「台静農先生の手は勤勉で、あれほど多量の文字と文章を書き、たくさんの絵を描き、多くの印章を彫った。しかもどれも人に好まれて、鑑賞され推賞された。今休息されることに、なんら心残りとするところはないのである。」<sup>11</sup>

ここに、師に対する尊敬の情は、抒情的な文章を通して表現されている。これは文人学者としての台静農先生の一生に対する総括であり、同時にまた作者

の感情が抽出昇華されたものでもあり、胸を打つ真摯さが見られる。

「情」とは散文の根幹である。林文月の抒情散文も、質朴な筆によって、故郷台湾に対する熱い思いを述べ（「東行小寄〔台湾東部旅行からの思い〕」<sup>12</sup>）、上海の生家における幼い生活に対して懐旧の念を寄せる（「上海故宅〔上海旧宅〕」<sup>13</sup>、「迷園」<sup>14</sup>）。また学生に対する配慮と心遣いを述べ（「我所期望于大学生的〔大学生に対する期待〕」<sup>15</sup>、「再見」<sup>16</sup>）「本」に対する自分の熱中、「木」に対する情感を描く（「三月曝書〔三月本の虫干し〕」<sup>17</sup>、「樹〔木〕」<sup>18</sup>）。林文月は鋭敏で繊細な芸術的感覚、豊かな古典文学の教養に基づき、事柄によって情を託し、事柄に触れて情を起こす。情の縦系と言葉の横系が織り合わされて、文章の筋は自然なものとなる。真摯な情感が織りなす抒情散文は、馥郁とした情に浸され、純粹さによる芸術的魅力を表現する。

林文月の散文の芸術的生命力は、彼女が受容した儒家の文化的伝統と密接に関連し、中華民族の理想的人格の観念を映し出す。一篇の散文作品は、社会生活が作家の頭脳において反映する産物であり、作家の内心の感動や道徳的選択、審美的判断を持たざるをえない。作家がその芸術的形象を創造するときも、作家自身の心と個性を刻印する。清の人劉熙載は言う、「詩品は人品より出ず」<sup>19</sup>、と。林文月の散文を読むと、作家自身の聡明で淑やかな気質を感じとることであろう。読むものは、素朴で些細なところから現れ出る細やかで誠実な心根と、善良純朴な気立てを感じることであろう。林文月の表現する真実の情感は、寸毫の隠し立てもない、わざとらしさのない真実であり、その中には彼女の人格的な真実の魅力を含んでいる。

### 3 .

林文月は次のように考える。「文学は文字を借りて個人の経験、懐旧の念を表現するものである。私達は文字を通して、幾多の懐旧、経験をとどめおく。それによって無数の人と意志疎通し、世事人生の多くの喜び悲しみを共に享受する。文学がなければ、人生はどれほど寂寞であろうか。」<sup>20</sup> 林文月は、日本文学の名著の翻訳や散文の執筆、自己の人生体験の中から、時の無常と人生の転変の理に目覚め、文学と人生の密接な関係について深く体得した。その散文の内容は、往々にして生活の中で触れあう人と事物を離れず、常々身近で平凡な事柄を選んで心を語る。物に感じて志を述べ、興に随って書く。或いは“擬古”の方法で、自らの懐旧の気持ちを古人のスタイルに合わせて表現する。擬古に

して古にとらわれない。或いは随想によって生命の豊饒を書き、友人間の尊い情誼を送り伝える。或いは独特の審美的視点から、旅行の面白みと異国の風情を描いて、自己の生活の気分を適度に整え、散文執筆の中から生活の楽しみを得るのである。

林文月には独自の散文美学の追求がある。散文を書くとき、「むしろ質朴さを採っても、美麗さを羨むことなく」<sup>21</sup>、とりわけ章節の構造と配置、韻律に注意する。林文月は、「散文の執筆は芸術的な工夫である」、と考える。<sup>22</sup>「あらゆる芸術は構造を重んじる、絵画がそうであり、音楽がそうである。散文における良い構造は、時には絵画的な視覚美の構造を備えることができる。そこで音楽的な韻律美の構造をも兼ね備えるにいたる。」散文の著作経験を語る文章、「散文的経営〔散文の工夫〕」<sup>23</sup>によって、林文月が散文芸術の追究において、我が国の伝統的な詩学から力を得ていることがわかる。我が国古人の文章著作においては、文章構成や、材料の取舍選択と配置、筋道の一貫性を重視し、しばしば苦心惨憺して、構成に念が入れられた。前後相呼応して、肝要な点と結末では、行くべきところに行き、止まるべきところで止まる。古人は行雲流水の如き自然な芸術的境地を追求した。これもまさしく林文月が畢生の力をつくして追求した美学的目的である。

林文月の散文における構成技術は多様・円熟の域に達していると言える。草花が風に揺れて美しい姿を見せるように、豊かで美しい芸術的旋律を表現し、彼女の豊富な芸術的素養と独自の芸術的創造能力を現す。見慣れた日常生活を題材として描写するとき、林文月は独特な特徴と意味をそなえた或る物象を選んで視点とし、情感をこめ、思考を展開し、個性的な思想内容を掘り出すことにたけている。「上海故宅〔上海旧宅〕」<sup>24</sup>の中の“旧宅”は、幼年時代の美しい時間を凝集し、社会的歴史的なあわただしい変遷の感を潜ませる。「手的故事〔手の物語〕」<sup>25</sup>は夫の手、自分の手から、子供ふたりの手の変化におよび、家庭の倫理的肉親の情における愛の天空を支えている。「鑰匙〔鍵〕」<sup>26</sup>の一文は、“鍵”を糸口とし、母が当時身につけていた鍵が体現する“權威感”や、自分と老家政婦の生活体験、人生觀察を連ねる。文章の末尾においてドアの扉から心の扉への連想は、巧みにまた自然と作品の思想的主題へと高まっていき、深い味わいがある。このほか、「樹〔木〕」<sup>27</sup>、「紅大衣〔赤いオーバー〕」<sup>28</sup>、「午後書房〔午後の書斎〕」<sup>29</sup>等の作品も、具体的感覺的な物を借りて焦点を合わせ、人生の感情的歷程に溶けこませて、春去り秋逝き、四季の交

替して、松明が受け継がれる歴史の変遷を書く。林文月の無頓着に見えるこうした題材選択と構想は、むしろ集中的に彼女の人生経験と感情の歷程を表現し、独特な芸術的創意を示すものである。

林文月の散文の芸術的構想は極めて良く整い、濃厚な詩的意趣が流れる。その根源を追求すれば、中国の古典文学の影響を受けており、謝靈運〔385 - 433〕の詩文の風格と内在的関連があって、古人の文才と想像が見られる。林文月の散文の精妙な文章構成は、しばしば文章のリズムの変化と感情の起伏の統一のなかに表現される。血管が脈動し、首尾が融合する文章構成には、曲折し起伏する音楽的旋律があり、ゆったりともの柔らかで、余韻が漂う。「関于秋天〔秋について〕」<sup>30</sup>はその代表作と言える。若いときの秋の印象から書き起こして、上海の梧桐の葉が風に落ちるときの、「言葉に言い表せぬ、心をかき乱す喜び」を書く。長じてから見知らぬ故郷台湾を訪れ、その土地に親しむ機会を持つが、しかし落葉した木々の間に空のある秋の景色は見つけ難かった。ただ古人の詩句から赤い楓と黄色い菊の秋色をより多く理解できただけであつた。また京都に旅をしたとき、「豊饒な草木の花の色が、心を酔わせ心にしみこむように美しかった」秋の情景を思い起こす。そこで転じて、フランス映画「秋風の吹く町」と人生の秋を意味する英語の古い抒情歌を思いだし、最後に、「自身がしだいに人生の秋に近づく」時の底知れぬ感慨に筆が向かう。秋の記憶の画面が徐々に開かれ、人生の感情的体験がだんだん深まっていき、内にこめられた感情の調べが緩やかに流れるにつれて、意と境とが一致し、言葉はその節度になう。起承転結が明らかで、柔軟で多様な姿を見せる。

林文月の散文は、自然さのなかの興趣という美学的目的を追求する。スケッチを得意とし、抒情にも長けている。画筆に正確さと迫真の力があり、また清らかな水に芙蓉の浮くような自然な優美さがある。その散文を読むと、余韻のつきぬ芸術的な喜びを感じることであろう。「風之花〔風の花〕」の冒頭を読んでみよう。

「風の花は、ひらひらと飛びかう、なお寒さの厳しい晴れた日に。

羽毛よりも軽く小さく、花びらに似て少し大きめで、白い花のように白い羽のように、こまやかでおおような雪が、青い空から緩やかにそっと漂い落ちてくる。一片、二片、三片、五片……数えきれない。満天の空に周りがみな風の花となり、大地に着くことなく烏有に帰していく。」<sup>31</sup>

雪が舞い落ちる自然を背景として、林文月は日本の老婦人とゆっくり「哲学

の道」に沿って歩き「法然院」を觀賞したときの、浮き立つような懐かしさを描く。言葉のリズムは自然で流暢であり、言は意にそって慎重に選ばれる。新鮮で輕妙な筆は、微妙に人の心を打つ美しくもの寂しい境地を創りだし、林文月の歡喜憂愁の記憶にともなう、淡々とした生命の哀愁を表す。

歲月の推移とともに、林文月もしいに老年の域に入り、人生の体得や散文芸術はさらに入神の境地に進んだ。近年、九歌出版社版の年度別台湾散文選に収録された作品から見ると、「潮州魚翅〔潮州フカのひれ〕」<sup>32</sup>は手のこんだ美味な料理を書く。林文月の「飲膳札記〔飲膳メモ〕」系列の散文は、料理の技術、食の趣味と追憶とを溶かしこんで、相互に味を引き立て本来の姿を損なうことがない。こうした調和のとれ力に充ちた技量は、頂点に達しているものである。

「夜談」<sup>33</sup>は“擬人”法の幻想的思考方法を用いて、椅子や鏡台等の家具の会話を描写する。かれらが体験したそれぞれの主人について、人生の境遇を述べ、世の中の毀誉褒貶や時代の変遷を表現し、林文月の人生觀察とその深い体験を結晶させている。「秋陽似酒風已寒〔秋陽は酒に似て風すでに寒し〕」<sup>34</sup>は、一杯の酒という光陰のうちに、小さな居酒屋の内外における気分の転換や感得をあざやかに説いて、人生の旅人としての感慨は深い自省を促す。この文章は九歌出版社1998年度「散文賞」を獲得した。

「謝朝華于已披、啓夕秀于未振」<sup>35</sup>〔朝華を已に披けるに謝り、夕秀を未だ振かざるに啓く。〕と陸機は言う。我々は心から期待する。林文月が散文創作の道において不斷に創造を推し進め、清新にしてのびやかな趣向と純粹な風格を持ち、詩趣哲理の含蓄豊かな作品をさらに多く書くように、と。

〔補〕：倪金華氏は1953年11月福建省に生れる。現在、国立華僑大学助教授、中国現代当代文学専攻。外国人客員研究員として、2000年4月より9ヶ月間名古屋大学言語文化部で研鑽された。この論文はその成果の一部として、発表するものである。（訳者記）

## 注

1『作品』林文月、九歌出版社、1997・6、初版第2刷 第83頁

2「雨游石山寺」林文月、『遙遠』、洪範書店、1986・5、第3版、第121頁

3「散文的經營」林文月、『午後書房』、洪範書店、1986・2、第1頁

- 4 『中華現代文学大系』 散文卷二 1970 - 1989 張曉風主編、九歌出版社、1989・5、第810頁
- 5 『作品』 九歌出版社、1997・6、前掲 第107頁
- 6 『遙遠』 林文月、洪範書店、1986・5、第3版 第16頁
- 7 『作品』 九歌出版社、1997・6、前掲 第111頁
- 8 『午後書房』 林文月、洪範書店、1986・2 第19頁
- 9 『作品』 九歌出版社、1997・6、前掲 第121頁
- 10 『作品』 九歌出版社、1997・6、前掲 第131頁
- 11 「作品」 林文月、『作家』、九歌出版社、1997・6、初版第2刷、第128頁
- 12 『午後書房』 洪範書店、1986・2、前掲 第155頁
- 13 『午後書房』 洪範書店、1986・2、前掲 第77頁
- 14 『作品』 九歌出版社、1997・6、前掲 第97頁
- 15 『遙遠』 洪範書店、1986・5、前掲 第159頁
- 16 『午後書房』 洪範書店、1986・2、前掲 第61頁
- 17 『午後書房』 洪範書店、1986・2、前掲 第1頁
- 18 『午後書房』 洪範書店、1986・2、前掲 第29頁
- 19 『芸概』 卷二，劉熙載。
- 20 『作品』 九歌出版社、1997・6、前掲 第189頁
- 21 『遙遠』 洪範書店、1986・5、前掲 第186頁
- 22 『午後書房』 洪範書店、1986・2、前掲 第6頁
- 23 『午後書房』 洪範書店、1986・2、前掲 第3頁
- 24 注13に同じ。
- 25 『午後書房』 洪範書店、1986・2、前掲 第93頁
- 26 『午後書房』 洪範書店、1986・2、前掲 第97頁
- 27 注18に同じ。
- 28 『作品』 九歌出版社、1997・6、前掲 第91頁
- 29 『午後書房』 洪範書店、1986・2、前掲 第5頁
- 30 『午後書房』 洪範書店、1986・2、前掲 第43頁
- 31 『作品』 九歌出版社、1997・6、前掲 第33頁
- 32 『八十五年散文選』 九歌出版社、1997・4、第218頁
- 33 『八十六年散文選』 九歌出版社、1998・4、第206頁

34 『八十七年散文選』 九歌出版社、1999・4、第11頁

35 「文賦」 陸機、『中国歴代文論選』、郭紹虞主編、中華書局、1962・1、  
第136頁

### 訳注

訳1 台静農（1902 - 1990）は、1920年代魯迅の指導の下で、韋素園等と未名社を組織し、雑誌『莽原』や『未名』半月刊を出版する。短篇小説集に『地之子』（未名社、1928・11）、『建塔者』（未名社、1930・8）等がある。1946年許寿裳の招きで、台湾に行き、のち台湾大学で教鞭をとる。

訳2 陸機（261 - 303）は六朝時代の詩人。この句は「文賦」に見える。  
『潘岳陸機』中国詩文選10 興膳宏、（筑摩書房、1973・9）によれば、その意味は次のとおりである。「開いてしまった朝の花はあっさりと捨て去って、まだほころばぬ夕べの花をこれから開かせるのだ。 中略 先人の用いた発想 『朝華』を離れ、清新で独創的な方向 『夕秀』をみずからの手で開拓しようというのである。」本文の訓読も同書による。

